

クローバー

能登地震によせて

今年の1月1日に発生した地震は2020年12月以降の一連の地震活動を含め「令和6年能登半島地震」と気象庁により命名されました。被害は能登中心として、石川県南部や富山県、新潟県、福井県、長野県など広範囲に影響があったのはご存じの通りです。地震というより震災とするべきのように思います。

私どもの病院は地震によりエレベーターが停止し、ちょうど夕食の時間だったため配膳が大変だったことと機材が少し倒れた程度でした。氷見市の病院では断水があったようですが、それにも増して能登地方の病院や介護施設の被害は甚大でした。それでも現地の病院や施設ではスタッフの想像を絶する努力で最低限の医療介護を続けています。本当に頭が下がる思いです。

能登地方で継続的な医療を受けられなくなった方たちはドクターヘリや災害用ヘリなどで内灘以南の病院施設に搬送されたり、DMAT（災害派遣医療チーム: Disaster Medical Assistance Team）の方たちが道路事情が悪い中でも遠距離の転院をしてくださいました。当院では原則脳血管障害の入院患者さんを受け入れましたが、自宅を離れ避難所や金沢以南の親戚宅などに身を寄せた方が脳血管障害を発症することもしばしばあり病床は逼迫状態となっていました。

能登地方の医療施設では少しずつ機能が回復しつつあります。しかし、報道されている以上に深刻なのは下水処理の回復が見通せないことのようにです。上水は運べるものの汚水の処理は大変で苦勞しておられるとのこと。病院機能の回復には施設間でかなり差があるようで、ある私立の病院では建物を耐震ではなく免震にし、災害に対する準備もかなりしっかりしていたため早期に診療の再開をはたすことができ、自院の入院患者を転送することもほとんどなかったようです。

病院長 山本 信孝



その一方で、他の施設ではいまだに十分な患者受け入れをできないところが多くあります。DMATは通常48時間で撤収しますが、能登は地域の特殊性からかなり長時間にわたり支援していただきました。今後は医師会主導のJMATがお手伝いすることになりますが、当院でもできるだけの協力をしたいと考えています。

通常なら急性期治療が落ち着きリハビリテーションが必要な方は回復期リハビリテーション病棟に転棟し、回復期病棟から自宅や介護施設に退院されることとなりますが、その受け入れ先がなく、なかなか退院が決まらないということも起きています。県は1.5次避難所への入所を勧めますが、ここは徘徊など認知機能低下があったり、尿道カテーテルや胃管が挿入されていたりすると入所ができないなどかなりハードルが高い状態です。それでも介護施設などは定員の5%増で受け入れるよう要請されたこともあり現在は少し病床の回転が改善してきています。

今後も同様の災害が起こる可能性は誰も否定できませんし予測することも不可能です。地震予知をすることは今後もできないと言われていています。あやしい予言がちまたに広がることもあります。しかし、準備をしっかりとすることは必要で、災害があるとその後にはホームセンターなどに災害対策用品が並びますが、災害後に購入するものではなく、これは事前に用意しなければならないものです。私どもの病院に目を向けると耐震構造ではあるものの免震ではなく能登と同程度の地震が起きた場合には病院機能の著しい障害を呈してしまう可能性があります。どのようにすれば病院の機能を維持し地域医療を停滞させないかを大きな課題として建物機材の検証を十分に先行対策について考えていく予定です。もちろん能登の復興を心から祈念することは言を俟ちません。

能登半島大地震 日本災害リハビリテーション支援協会

2024年1月1日の大震災発生で多くの方々が被災されました。心よりお見舞い申し上げます。

大災害は生まれて初めてやってくる

災害は忘れたところにやってくるといわれ、関東大震災(1923年)から101年目の本年1月1日に能登に大震災が発生しました。関東大震災後、日本各地で大なり小なりの災害は忘れる間もなく発生していましたが、金沢生まれ育ちの自分には実際に大きな地震を体験したことがなく、かなり、他人事でもありました。

災害に対する個人的な経験として、両親からは福井地震(1948年昭和23年)の揺れはひどかったと聞いたことがありましたが、大きな台風も石川県へ来る頃は弱まっており、また、3・8の豪雪では雪道が二階の高さまでありましたが、当時中学生の私は災害というより雪で遊んでいたような記憶が残っています。

災害の少ない地域に住んでいるとの安心感がありました。

ところが、今回はとてつもなく大きい地殻変動で人家はひとたまりもなく破壊され、そのうえ、火災、津波まで発生してしまいました。

昨秋、関東大震災100年企画展(写真1)が開催されましたが、大正時代は耐震、耐火の考えも乏しく、また、炭火や薪を使っていたこともあり、被害が大きかったのだろうと安易に思っていました。



(写真1) 関東大震災100年企画展
国立科学博物館2023年秋

防災の考えが進歩した現代ではよもやそんなことにはならないだろうと思いついていました。

災害を見れば誰でも

何とか力になりたい気持ちが湧きおこる

発災からのテレビを見れば被害の大きさが次々と明らかになってきています。多くの団体が被災者支援に動きだしています。初期にはDMAT、消防、救急、自衛隊、警察、防災のプロの方々が素早く現地に入って活動を開始しました。

日本災害リハビリテーション支援協会(JRAT)について

東日本大震災では避難所での生活悪化により、高齢者、障害者などの生活不活発病、災害関連死が多数発生したことから、これらの予防が重要であるとしてリハビリテーション支援関連団体が集合してJRATが発足いたしました。

今回、北陸地域のリハビリテーション科医師の支援活動参加者募集が行なわれ、私の初回参加は1月13日でした。

いしかわ総合スポーツセンターでの活動

金沢医科大学のリハビリテーションセンターに石川JRATの本部(1月13日に石川県リハビリテーションセンターに移動)が開設され、8時30分に集合、打ち合わせ、その後、1.5次避難所であるいし



(写真2) 他県からの支援チーム 職種別、地域別にビブスの色が異なっている



(写真3) 支援チーム 職種別にビブス

(JRAT) の活動に参加して

副院長 宗本 滋

かわ総合スポーツセンターへ向かいました。

避難所ではDMAT、JMAT、JWAT、福祉団体、2次避難所への案内など多職種の団体が色とりどりのビブスを着てブースを設置、活動しており、県外からの応援も多く見受けられました。(写真2、3、4)

スポーツセンターでは避難者を高齢者でも比較的援助が軽度ですむ人たち、トイレや食事に介護士が必要な方たち、さらには認知症などが加わりもっと重度な方たちと3カ所の住み分けが行われておりました。能登から搬送されてくる方、数日で2次避難所へ移動される方と入れ替わりが激しく、おおよそ250-300人近くがおられたようです。

リハビリテーションチーム

リハビリテーションチームは医師、理学療法士、作業療法士の3人が1チームとなり、それぞれの区域を巡回するという形で行なわれました。言語聴覚士は嚥下支援のため別働となっておりました。

具体的な活動としては、一人一人の避難者をリハビリテーションの視点から評価します。歩行、立ち上がり、食事、排泄、更衣などの項目を自立から介助の必要程度に応じて、5段階にトリアージを行っていき、支援内容を見定めていくものでした。

リハビリテーションの指導や、車椅子、立ち上がり補助具、滑り止めマットなどの福祉用具も手配していき、深部静脈血栓症予防のための弾性靴下も

適宜配布装着しました。

狭い1テントに2人、段ボールベッドという非常時の生活であり、高齢者にはとても厳しい環境だと思われました。(写真5)



湧きおこる自問 今後に向けて

被災者の視点に立つ支援 それは「リハビリテーションをして欲しい」でしょう。しかし、現在の活動では個別のリハビリテーション希望には応えきれておらず、日常、リハビリテーションを受けていた人たちにまったくリハビリテーションを提供できていないのが活動の実態でした。

JRATの活動もまだ道半ばと感じました。

おわりに

「地殻変動には備えあれども歯が立たぬ」という思いを強くしました。

100年後に「能登半島地震」企画展が開かれるでしょうか？その時の人々はどう感じるのでしょうか？

被災された方々、関係者の方々が一刻も早く安心できる日常生活を取り戻されることを心から願っております。

令和6年2月1日 記



(写真4) JRATのブース

の色が異なっている



(写真5) 避難所のテント 段ボールベッドが左右2つあり、2人居住用となっている

連携登録医のご紹介

医療連携とは

地域の医療機関と金沢脳神経外科病院の相互連携を一層緊密にし、適切で切れ目のない医療の連携を目指し開始された「連携登録医制度」に登録していただいている医療機関の先生方です。

今回は、能美市大成町の
「米島医院」をご紹介します。

院長 米島 正廣先生
副院長 米島 淳先生

当院は能美市(能美根上駅 徒歩1分)にあり、内科・消化器内科・小児科の診療を行っています。

小さなお子様からお年寄りの方まで、安心して通って頂ける“身近なかかりつけ医”として、優しい医療を届けたいと心がけています。

専門領域である消化器内科診療としては、つらくない内視鏡検査の実践に努めており、外来診療、がん検診などで内視鏡検査を御希望の際には遠慮なくご相談ください。

また、在宅患者様の訪問診療・往診を行っております。

医療を取り巻く制度は年々と変わっておりますが、病院とクリニックの連携が重要と感じています。

病院での専門外来と、クリニックでのオールラウンドな医療のバランスを常に意識しながら、患者様1人1人にあった医療をお届けしたいと思っております。

皆様の1度きりの大切な人生において、当院が微力ながらも一助になれば幸いです。

お困りの点があれば、気軽に御相談ください。スタッフ一同、皆様のご来院をお待ちしております。



副院長
米島 淳先生

【資格】

2018年 内科認定医
2019年 消化器病専門医/肝臓専門医/認定産業医
金沢大学 大学院 医学博士

【略歴】

平成22年3月 金沢大学医学部医学科卒業
平成22年~23年 聖隷横浜病院 初期研修
平成24年4月 金沢大学第一内科 消化器内科 入局
金沢大学附属病院 消化器内科 勤務
平成31年4月 金沢赤十字病院 消化器内科 勤務
令和3年4月 米島医院 副院長

【診療科】内科・消化器内科・小児科・内視鏡検査・健康診断・予防接種・産業医

【住所】石川県能美市大成町118-6

【電話】0761-55-0241

【診療時間】

	月	火	水	木	金	土	日
9:00-12:30	○	○	○	◆	○	○	
16:00-18:00	○	○	○		○		

◆=9:00~12:00

休診日：日曜日 祝日 木曜午後 土曜午後

取材スタッフより

穏やかでなんでも相談できそうな優しい先生でした😊



病院理念

私たちは脳神経外科医療の専門家として十分な医療を提供し社会に貢献します。



医療法人社団 浅ノ川
金沢脳神経外科病院

石川県野々市市郷町262-2
TEL:076-246-5600 FAX:076-246-3914
<https://www.nouge.net>

金沢脳神経外科病院 広報誌 第89号 発行:広報委員会
2024年3月1日発行